

何も起こりはしないであろう、場を除いては

坂巻康司

本書は、二〇一三年十二月に神戸大学にて開催された研究集会『«RIEN N'AURA EU LIEU QUE LE LIEU» : 関西マラルメ研究会創立二十周年記念シンポジウム』において発表された口頭発表を基に編まれた論集である。

多くの読者の方々ととって「関西マラルメ研究会」とは聞き慣れない名称と思われるので、ここで簡単に説明させていただきます。この研究会は二〇〇三年四月に兵庫県神戸市で設立された学術研究グループであり、その名称からも明らかのように、フランス象徴主義を代表する詩人ステファヌ・マラルメを研究することを目的としていた。当時、大阪大学博士課程に在籍していた筆者が、前年に知り合ったばかりの中畑寛之氏（当時は神戸大学助手、現在、同大学教授）に声をかけたのがすべての始まりであった。その後、足立和彦氏（当時は大阪大学博士課程、現在、名城大学教授）を加え、さらに森本淳生氏（当時は京都大学人文科学研究所助手、現在、同研究所教授）を最初の例会の司会者として巻き込むことにより、この小さな研究会は産声を上げることになる。やがて、フランスから帰国したばかりの廣田大地氏（当時は大阪大学学部生、現在、神戸大学准教授）が加わり、月一回の読書会と半年に一度の例会という活動が続けられて行くことになる。こうして、関西在住の数名の若い研究者がほとんど偶然に誘われるように集うことになった。

読書会が第一の目標としたのは、難解で知られるマラルメの批評的テキスト「芝居鉛筆書」<sup>※</sup>「Crayonné au théâtre」のプレオリジナル「演劇に関する覚書」<sup>※</sup>「Notes sur le théâtre」をすべて読み解くことだった。しかしながら、わずかな十数編のテキストであったにもかかわらず、箇所によつては四時間かけても数行しか読み進めないような場合も度々あり、テキストをすべて読み終えるのに五年近くもかかってしまった。いまとなつては恥ずかしい限りであるが、当時はこれでも精一杯だったのだと思う。この五年という歳月の中、足立氏や廣田氏は各々の留学のために代わる代わるフランスに旅立ち、数年ほど離脱してしまうことがあった。しかし、彼らが研究会に参加している時に発揮した尋常でないほどの集中力が、テキスト読解に多大な貢献をしてくれたことは間違いない。

こういう形で進化した読書会に対し、他方の例会が目指したのは全く異なるものだった。この例会は、マラルメの専門家はもちろんのこと、必ずしもマラルメを専門としない他分野の多様な研究者をゲストとしてお招きし、その方々からマラルメと絡めてご自身の専門領域についてお話を伺うという形で進んで行った。そこにはフランス文学の研究者のみならず、ドイツ文学、比較文学、音楽学など多彩な研究者が集い、いまから考えれば「よくぞここまで越えたださった」というような篤志の方々も多数おられた。例会は二〇二〇年三月を最後に、新型コロナ・ウィルスの感染拡大により頓挫するまで、実に二十六回に亘って開催されることになる。いずれにせよ、この例会によつてメンバーは多大な知的刺激を受けることになり、そこに参加してくださった方々のおかげでこの研究会は今日まで辛くも続けることができたと言える。二〇二三年に開催した記念シンポジウムは、以上のような研究会の活動にこれまで何らかの形で関わってくださった方々に改めてお声がけをし、参加を快諾してくださった方々によつて実現することになったものである。また、このシンポジウムの実現にはフランス抒情詩研究会の皆さんのご協力も欠かせなかった。二〇一八年から活動を始めた同会の代表を務めている中山慎太郎氏（跡見学園女子大学准教授）と廣田大地氏のお二人に、ここで改めてお礼を申し上げたい。

さて、この記念シンポジウムでは「RIEN N'AURA EU LIEU QUE LE LIEU（何も起こりはしないであろう、場を除いては）」というマラルメの代表作とも言える『賽の一振り』の一節を共通テーマとして掲げている。その意味については最後に述べることにして、その前に本書の各章の内容について簡単にまとめてみよう。

第一部ではマラルメと同時代を生きた文学者たち、そしてその後継者たちを扱っている。第一章ではボードレーールとバンヴィルという、若き日のマラルメにとって極めて重要な位置を占めていた二人の先輩詩人に焦点を当て、彼らとマラルメとの関係性からいま何を導き出せるのかを各々の専門家に語っていただいた（廣田論文、佐々木論文、小倉論文、五味田論文）。そして第二章では、マラルメの同時代人の内、直接の関連性はないもののその文学世界が微妙な形で重なり合う文学者を取り挙げた。ここではランボー（中尾論文）、グールモン（合田論文）、モーパッサン（足立論文）の三者の立ち位置を見ることができるようになっている。続く第三章では、マラルメの後継者と見られた二十世紀前半を代表する二人の詩人を取り挙げる。一人が、最も忠実な弟子でありながら、師を乗り越えるほどの壮大な企図に挑み続けたヴァレリー（森本論文、鳥山論文）、そしてもう一人が、師の言葉を反芻しつつ、師とは異なる独自の世界を構築することを望んだクロードル（大出論文）である。現在、マラルメという問題圏を考えるに当たって、この二人を逸することは到底できないであろう。

続く第二部ではマラルメと現代との関りに焦点を当てる。まず第四章では、二十世紀以降に起こった多種多様な文学の変動状況において、マラルメという詩人がどのような位置を占めることになったのかが問われることになる。ここでは、シュルレアリスムを代表する詩人ブルトン（有馬論文）、現代ドイツで最も重要な詩人の一人と見なされるツェラン（國重論文）、現代フランスを代表する詩人として二十一世紀まで活躍し、晩年に至るまでマラルメを論じ続けたイヴ・ボヌフォワ（中山論文）の思想が検討される。と同時に、音声の面から詩の理念を突き詰めたメシヨニックのような詩人にまで与え続けたマラルメ詩学の意味についても論じられるであろう（森田論文）。さらに第五章では、現代思想とマラルメの関連性が論じられる。二十世紀から二十一世紀の現在に至るまで、ある意味で最もマラルメに拘り続けたのは哲学者たちであった。いずれも現代フランスにおいて斬新な思想を絶えず提示し続けている三人の思想家、ランシエール（鈴木論文）、バディウ（坂口論文）、メイヤスー（大橋論文）といった哲学者にとって、マラルメがいかに重要な存在であり続けるのかについて改めて論じられることになるだろう。そしてエピソードとして、現代フランスにおけるマラルメ研究の現状（坂巻論文）、そしてマラルメの「ヴァルヴァン劇場」についての調査報告が付け加わることになる（中畑論文）。

以上のような論集の内容も含め、<sup>△</sup> RENN'AURAEU LIEU QUE LE LIEU (何も起こりはしないであろう、場を除いては) というテーマを掲げた理由を最後に語っておこう。結局のところ、関西マラルメ研究会とは《マラルメに何かを求める人々が集うひとつの「場」》であった、ということだけは事実として言える。実際、この詩人を中心に人々が集うその空間——それは、(もしも比較できるとしたらの話だが) 百五十年前ならば「火曜会」と呼ばれたかもしれない——は、マラルメという煌めく名をめぐる、一種の「星座」のような形態のものであったとも言える。つまり、敢えて比喩的に書いてみるならば、ステファヌ・マラルメという名の詩人はあたかも一つの銀河、一つの星団の中心のような存在であり、どのような思想であろうとその中に飲み込まれ、渦のような中心からまた新たに何かが産み出されて行くかのような存在なのではないだろうか。そこで何が起きているのかははっきりとは分からない。しかし、何かは確実に起きている。このような、一見混沌としたように見える奇妙な空間を正確に定義づけるような言葉は存在しない。それはやはり、「場」としか呼びようのない何かなのではないか……。実際、マラルメ自身もそのような詩を書いていたことが思い起こされる。

そうだと、分かっていて、この夜の遥か彼方に、地球は

投げかけている、輝きも 強大な 異形の神秘を、

おぞましい 世俗の支配する下でも、その光の 曇らされることはない。

空間は、拡大しようと、自らを 否認しようと、己自身に異ならず、

この倦怠のうちに 展転せしめる、卑しい火を まさに証人として。

そこに光を発するのは、祝祭の最中、一天体の 天才であったと。

(闇が 宿命の掟によって……) 第三、第四詩節、渡辺守章訳)

「何も起こりはしないであろう、場を除いては」という言葉に込めたこのシンポジウムの企図が、この詩の中にも感

じられるのではないだろうか。確かに、人々が集ったこの「場」は一つの「祝祭」でもあり、そしてその最中には、マラルメという名の「一天体の天才」の出現を感じ取れたように思う。本書に収められた論考にも執筆者各々の個人的な思想が示されており、それらが積み重なることで、この詩人の多彩なあり方が提示されているのではないだろうか。もちろん、それが実現できているかどうかの最終的な判断は、読者の皆さんに委ねるしかない。